

コロナ禍による世界酪農危機：不安心理が先行、混乱本格化はこれから？

International Farm Comparison Network (IFCN) がプレスリリース

世界 70 カ国以上の酪農乳業の専門家が、国際酪農比較ネットワーク IFCN (International Farm Comparison Network) の定例総会「IFCN Dairy Conference 2020」(6月2、3日にウェブ会議で開催)で、新型コロナウイルス禍による“酪農危機”について話し合った。世界酪農の現状と、危機からの脱出への筋道に焦点が当てられた。米国とインドが酪農危機の震源となっているとの認識は共有されたものの、「現在の状態からさらに悪くなるのか、それとも底打ちといえるのか」については専門家の間で見方が分かれた。以下、IFCN が会議の内容をまとめたプレスリリースを紹介する。

危機の前年—2019 年を再検証

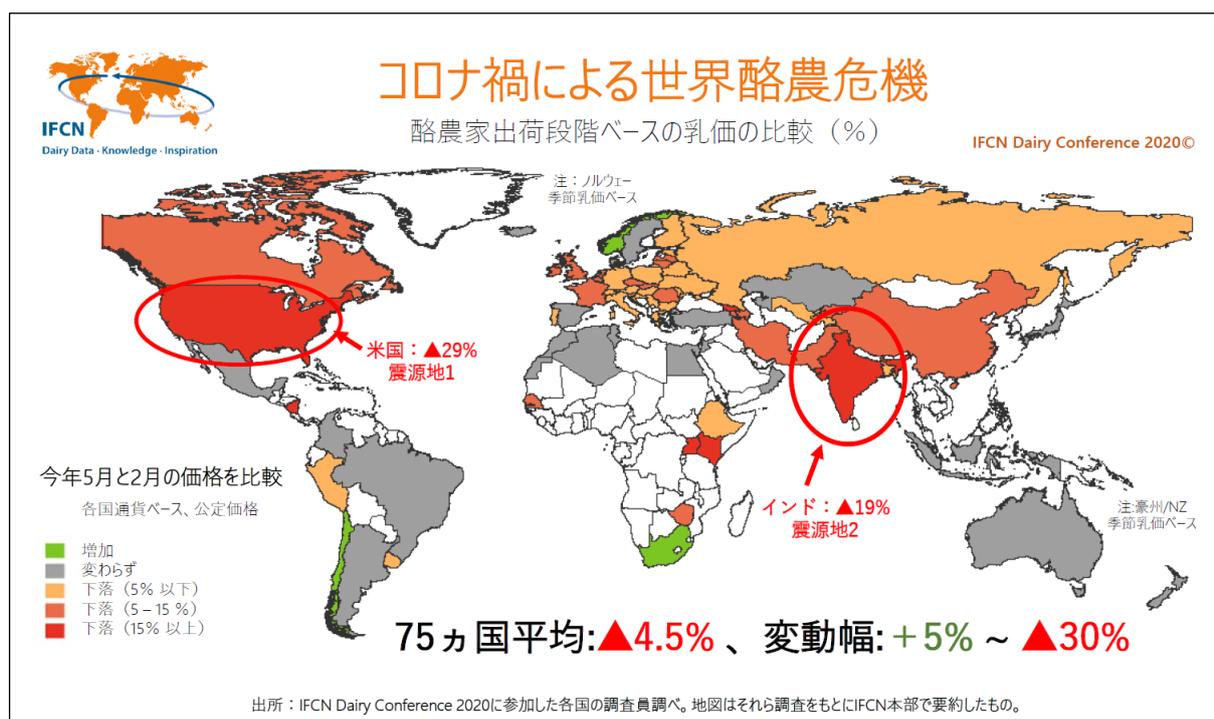
IFCN(*1)で調査した2019年の世界の生乳生産の伸びは1.4%で、長期的な平均値である2.3%を大きく下回った。これは主に、インド、オセアニア、アフリカ、中東での減産によるものだ。一方、先進国では植物由来乳の人気の高まり、新興国では牛乳乳製品の需要の伸びが減速した。

世界の乳価格(*2)は2019年に6%上昇して37.3ドル(約4000円)/100kgのレベルになったため、生産現場の収支は持ち直したよ

うにみえた。それでも、特に米国とEU(欧州連合)では、この乳価格レベルは多くの酪農家にとって「生活していくには微妙なレベル」(*3)だったと、IFCN 代表であるトルステン・ヘンメ氏(Dr. Torsten Hemme)は語った。

危機への道—2020年5月まで(図)

酪農家出荷段階の乳価の実績は、危機の状況を見るための指標となり得る。図は、75カ国の2020年5月と2月の乳価を比較している。平均すると、下落幅は4.5%にとどまっ



おり、大規模な危機には見えないといえる。

とはいえ、“酪農危機の震源”といえる二つの酪農大国、米国とインドでは、乳価下落幅はそれぞれ 29%、19%だった。ウェブ会議で行われた専門家へのアンケート調査では、3分の1が、自国は危機の始まりにいるにすぎないとした。ただ同時に、3分の2は危機の底を打ったとみている。

危機からの脱出—年末までの乳価格見通し

2020年の世界の乳価格の見通しは混沌の中にあり、先物市場の動向とアナリストの見方は一致していない。6月上旬時点では、乳製品の先物価格は、欧米の都市封鎖開始前後に付けた30ドル/100kgを下回る水準から、7月に急速に回復し35ドルに達すると期待している。これは「V」字型の回復シナリオといえる。しかし会議参加者の大部分は「U」字型のシナリオを見込んでおり、以前の価格水準に達するまでには長い期間を要することになるかもしれない。2020年の乳供給の増加と併せ、経済危機によって1人当たり需要の減少が見込まれるためだ。

乳製品在庫量の今後の推移や、途上国での流通形態の変化(市場を通さない流通形態から牛乳・乳製品工場が集乳する流通形態へのシフト)について、さらに調査が必要だ。ただこの変化は、乳製品の輸入にプラスの影響を与える可能性はある。

今回のウェブ会議で明らかになったのは、今後も酪農関連指標をリアルタイムに見ていくことこそ鍵だということだ。IFCNは数か月以内に調査を更新し、世界の酪農乳業に関わる人々の指標になるデータづくりを行うことで貢献していきたいと考えている。

注:

- 1) IFCNは酪農乳業の研究者と事業者らでつくり、組織本部をドイツ・キールに置く。会員は100組織を数え、活動に参加している研究者は世界100カ国以上から参集。近年は国連食糧農業機関(FAO)や国際酪農連盟(IDF)など国際機関と連携した活動も始めている。2000年には酪農経営に関するデータ収集を始め、その比較分析を主要な事業として位置づけた活動を行っている。
- 2) IFCNは世界の乳製品価格を、スポット取引ではバター/脱脂粉乳、チーズ/ホエイと全脂粉乳価格をベースとし、先物取引ではバター/脱脂粉乳のみをベースにして独自に算出し、長年にわたり過去の価格動向把握や将来の価格予測に役立てている。
- 3) 原文は“too little to live on and too much to die”。

(Jミルク 国際グループ 折原 淳)